

日本で刊行された仏教関係叢書について

大正大学人間学部仏教学科教授 木内 堯 央

木内 ご紹介いただきました木内でございます。日本の天台思想が私の専門でございます。そんなことで自分の使わせてもらっている書物の関係で、少しお話をさせていただきます。よろしくお願ひします。

お配りした資料は、日本で明治以降に刊行されている大蔵經、一切經と呼ばれているもののリストでございます。

きょう、なぜお話を引き受けしたかと申しますと、今からおよそ三十年余り前のことですけれども、私が大正大学の大学院の修士課程に入ったころ、東京の大蔵出版という会社で『大正新脩大蔵經』が、再刊をすることになりました。当時、私の研究室には中国天台をご専門とする塩入良道先生がいらっしゃいまして、この先生が『大正新脩大蔵經』の編集主任として、大正大学とその出版社の一室とを行き来していらっしゃいました。私はその縁で、学資を稼ぐアルバイトにそこへ行くことになりまして、再刊の仕事を手伝わせていただいたということがありました。大学院が終わり、いろいろなことがありまして、途中で完成を見ずして、仕事としては辞めましたけれども、その後もいろいろ関係を持って、お手伝いをさせていただきました。今回は、そういった事業というものがどんなふうに行われていたか、そんなこともご披露しながら全体を見ていこうと思ったわけでございます。

それでは、日本における大蔵經の流れを簡単に辿ってみようと思ひます。

ご存じのとおり、奈良時代の天平の写經というのはたくさん残っております。当時は国

家事業の形で唐の国から入ってくるお經を、逐次、写經生を集めて書き写したのです。今、正倉院の文書に「写經司解」（写經司告）というものがたくさん残っております。紙がどのくらい必要であるとか、筆を何本とか、墨何丁とか、あるいはお給金とか、灯明の油をどのくらい欲しいとか、そういうことが書かれています。それを読むと、天平の写經の様子や経済的な状態までがわかります。

当時の日本では、仏教の叢書が輸入されると、全て書き写していくという事業が積極的に行われていました。現在も光明皇后や長屋王の名前の入った断簡とか、經疏がたくさん残っております。そういうところから一切經というものが始まっているわけです。

もう一つ、皆さんもご存じかもしれませんが、申し上げておきたいのは、唐の時代に智昇（總章元—開元28, AD668—740）という人がまとめました、『開元釋經錄』（唐開元18, AD730）という經錄のことです。その当時、仏教の全体にどのようなお經があるかわからない日本人が、中国へ行ってお經を持ってこようということになりますと、お經のリストである經錄が頼りなのです。中国へ行ったかたで有名なものでは興福寺の玄昉という人です。ああいう人たちが手に参考書として持っていたのが、この『開元釋經錄』なのです。そうしますと、これをチェックしながら、お經を集めるということになるのでしょう。

そういうわけで、天平、奈良時代と呼ばれている時代には、『開元釋經錄』の範囲のものしか持ってこないのです。この後にできた、『貞元新定釋教目錄』（唐代圓照著（貞元16,

AD800成]のほうなら出てくるというものを持ってこない。こういう現象が起きてしまいました。例えば、不空(神龍元一大暦9, AD705-774)の翻訳した膨大な密教の経典は中国にはあっても、日本にはほとんど入ってこない。奈良時代の仏教というのは、早く言うと『開元釋經錄』の仏教までなのです。そして、平安仏教になり弘法大師を初めとして、不空訳の密教の経典が膨大に輸入されるようになり、平安仏教が形成されることとなるのです。

ですから、こういう経録というものによって奈良仏教と平安仏教の性格が左右されたのではないかというところが、一つ気になっているところでございます。

そんなことがありまして、日本では一生懸命、お経を写そうとします。当然、南都七大寺(大安寺、薬師寺、元興寺、法隆寺、東大寺、興福寺、西大寺の七寺)、あるいは新興の天台宗比叡山延暦寺とか、そういうものがありますと、そこで坊さんが勉強をする、仏教を修行するために、お経が必要ということになりまして、一切経を写さなければならぬということになります。

一切経を写すという作業において、奈良の写経師という方々が活躍されて、あちこちの寺にスカウトされるということもありました。

もっと極端なことを言いますと、空海・最澄の文字というのはいい字だとか、王羲之がどうだとかと、書家の先生たちはいろいろおっしゃるのですけれども、これは素人目かもしれません、写経をしていた人たちの書体というのが一番参考になっているのではないかなと思ったりしております。そういうことで写経体とよく言われるような字形が固まってくるのも、こんな発端があるわけです。

当時は南都七大寺というものが国家の重要な仏教の拠点でありました。例えば、最澄が書物を持って帰りますと、それを必ず七つずつ写すことになっているのです。自分のところも含めて八つになるのでしょうか。写したものは七大寺に分ける。そういうことがそのころの決まりでした。

そういう状態にありましたものが、延暦寺・高野山金剛峯寺を初めとして新しい寺院

が数多く誕生していき、あるいは、定額寺と言われるような貴族の氏寺であったものが、国家的な保護を受ける正式のお寺になっていく。早く言えば得度者といましようか、お坊さんにする人を養成するようになると、もちろんそこにも一切経が欲しくなる。こういうことで日本の一切経というのはあちこちに写されて、所蔵されるようになります。

その一方で、写経のプロフェッショナルである写経生が活躍し、写経体の文字が生まれ、奈良で墨がたくさん製造されるようにもなりますし、あるいは紙が多くすかれるようになるでしょう。そういう文化的な波及効果はいっぱいあったわけです。ところが、一切経が一通りそろってしまると、写経生に用がなくなってしまいます。しかし、新興のお寺さんが、新たに一切経をそろえようとするため、写経生の腕は生きていったわけです。九州や関東にまで写経生が移動していった形跡が見られます。

それから年代がたっていきますと、お経そのものに対する信仰というものが盛んになっていきます。例えば『日本霊異記』[景戒撰(弘仁頃成)]には、『法華経』を読んでいた人のどくろが落ちていたら、舌だけが腐らないでいたという話が残っています。

また、『法華経』というお経自体がそんなところがありまして、最後には日蓮上人が「南無妙法蓮華経」という経題を唱えるという信仰を集約されるように、お経そのものが、仏様と同じだ。もうちょっと言い方を変えますと、お経もいわゆるお釈迦様が説いて残されたもの、残されたお舍利、お骨に等しいものだと考えられます。実際に『法華経』を読んでいきますと、最初のほうにお舍利を大事にする、塔を立ててみんなでご供養をする、そういうことが出てまいります、そのうち、お舍利にとってかわってお経になるのです。

『妙法蓮華経(法華経)』というお経そのものが、残された影響力を持つものですから、仏様そのものと考えられまして、それにご供養をするということがお経の中で勧められているのです。

最近のことですが、比叡山の延暦寺に法華総持院東塔というものが寄進されました。そ

の落慶式のときに、『法華経』をみんなで書いて比叡山の東の多宝塔の中へ納めて、そのお経を供養するという形の法会が行われました。

そのときに、どういうことをやるかという、みんなが生きている仏様に差し上げるように、花やお香、あるいは食べ物、果物、お菓子などを捧げてお経の供養が行われるのです。

また写経自体を一つの供養の形式とする動きも生まれます。堀河天皇のころ、嘉保三年(1096)、坊さんと俗人、僧俗一人に手分けをして、一日で一切経を写させたというのです。その記録が、一切経供養の初めだと言われています。新しいお寺さんができたり、お寺さんが復興したりすると、お経が古くなっているから新しくするとか、ないから備えるということで、供養が行われました。

一方、印刷の歴史でも、日本の法隆寺の百万塔に陀羅尼を収めたもの(陀羅尼の入った高塔、小塔)が、日本の印刷術の最初みたいなふうに紹介されます。それから時代は下りますが、十二世紀の初めにお経を刊行しよう、刷って配ろうということも試みられたらしいということが言われております。やはり堀河天皇の康和四年(1102)三月に行われたという記録が残っております。

日本でこの一切経というものを本格的に印刷刊行したのは、有名な『天海版』です。上野に寛永寺をつくってもらった天台宗の天海(玄眼大師、AD1536-1643)というお坊さんが、家光の命を受け、一切経を刷ろうということになりまして『天海版』というものをつくります。その『天海版』というのは、これは木活字なのです。版木ではありませんから、一つ刷っては崩して、また字を並べかえて、植字をして、次を刷るという大変な技術です。その一部は今でも残っています。刷り上がったものは寛永寺にあるということになっていますが、まだ実は、私は直接見ておりません。寛永十年(1633)から慶安四年(1651)、約十八年ほどかかって6423巻、部数で1453部刷られた、こういう数字が残っております。『天海版』の一切経というのが、そのような形で刊行されました。

その後は、『鐵眼版』(『黄檗版』)でございます。宇治の万福寺の経蔵に、鐵眼禪師(鐵眼道光、AD1630-1682)が改版した一切経がありますが、これは活字ではありませんで中国の『明版』です。『明版』の大藏経をかぶせ版なんていうふうに申しますが、木の上へお経を貼ってしまって、彫ってつくったのです。そういう刷り方で『鐵眼版』と呼ばれているものがあります。

その『鐵眼版』は、幕末から明治にかけてまで仕事は続いていたようなのですが、『明版』のお経を裏返して貼ってそれを彫っていくという、復刻の仕方をしてしまったので、そのまま彫るわけです。ですから、『明版』に多少、文字の間違いがあっても、それは直らないわけです。

そこで、獅谷忍激(正保2-正徳元、AD1645-1711)という人が、この『鐵眼版』のままでは、校訂・対校をしていないので、残念だと考えました。せっかく日本で新しく、お経を流布するならば、きっちりとした対校をして、字を正して出したいと考えて、対校をして自分で校本をつくらうとされるのです。

その経緯を見ていきますと、1704年から1710年の宝永年間に、忍激上人が、『明版』と『高麗版』とを対校をします。『高麗版』というのも、実は手元になくて、京都の建仁寺にありました。その建仁寺の『高麗版』を見せてもらって、自分の手元にある『明版』と対校をしようと考えられたのですが、お経は大事なものですから、建仁寺はその『高麗版』を、経蔵の外へ出してはいけないというふうに断られるのです。そこで近衛家熙(寛文7-元文1、AD1667-1736)さんをお願いをして、建仁寺を説得してもらいまして、対校を果たすことが可能になりました。

もう一つのよりどころが、芝の増上寺にあります『高麗版』です。それも用いて対校いたしましたして、大勢の人を動員して全体にわたってそれを行いました。対校の作業が始まったのが宝永三年(1706)そして、宝永七年(1710)四月にそれが完成しました。

その後、明治十八年に増上寺の福田行誠大僧正が中心になられて、増上寺の『高麗版』を中心にして足りないところは『宋版』『元

版』を使って『大日本校訂縮刻大藏經』（『縮藏』）と呼ばれるものを作りました。その際に一番参考としたのは、忍徴さんの成果なのです。

しかし、まだ印刷の中で間違いが見えてきた、そういうのを全部、原本のわきに朱書きをしていきまして、今、大正大学がそれを全部持っています。

建仁寺の『高麗版』は、残念ながら、天保八年（1837）に火事で燃えてしまいまして、四十九巻しか残っていないというのです。逆に、忍徴さんのおかげで、それを反映したものが残っています。

中国のほうでは、唐の末、唐の時代に高麗のほうで改版された、『高麗版』が時代的には向こうで一番古いわけです。その後、宋、元、明で新しい版ができています。要するに古い版ですから、『高麗版』のほうに対校していくという必要がある。そういう姿勢が、この『縮刻大藏經』で成果としてでき上がった。

これは別の話ですけども、増上寺の『高麗版』は、家康が増上寺へ寄附したものです。その分量は6467巻という数字です。大和の忍辱山田城寺にもともとあったものを家康が自分の氏寺ですから、増上寺のほうへ寄附した。そういう経緯で増上寺のほうに『高麗版』があった。また忍徴はそれを作業の中で対校したということになるわけです。

また中国では、上海で、清の宣統三年（1911）。台湾では中華民国九年（1920）『頻伽藏』と呼ばれるものが復刻されております。

その後、『卍字藏經』と呼ばれるものが出版されます。これは京都の濱田竹坂さんが藏經書院を起こして、その仕事を始め、米田無諍という人が編纂に当たった。このときも、忍徴さんの『明版』の校訂と、建仁寺の『高麗版』とを対校したものを底本にして、『卍字藏經』として実現をしたということになります。

ここでは、いわゆるインド、中国、撰述に限って出しておりまして、それを補う形になりましたのが、次の『大日本續藏經』で、『卍續藏』、あるいは『續藏』と呼ばれているもので、これは前田慧雲先生と中野達慧先

生の成果であります。

『卍字藏經』に編入できず『卍續藏』に入れられたものはどんなものがあるかといえば、『鐵眼版』の中の「北藏續入經」という、後から加えられたもの。それから、密教の経軌、それから偽撰とされて入れられていなかったものなどです。ただ、語録はたくさんあるものですから、全部尽くせなかったようです。これが第一輯です。日本撰述による第二輯も企画され、いまだかつて、日本の人の書いたものが、一切経として編纂されていなかったものですから、何とかしようとするのですが果たすことはできませんでした。このとき中心になりました中野達慧先生が『日本大藏經』としてこれを刊行しました。

そして、『大正新脩大藏經』になるわけです。

約三十年ほど前に『大正新脩大藏經』は再刊されました。再刊の際に、我々は字が見えないところをどうしたかというのと、一つは、前に出した『大正新脩大藏經』の旧版をもちろん見ました。旧版でも、難しい字、珍しい字は木活字なのです。木で彫って、植字をしてありまして、そのために活字の高さが高すぎて、濃くなって、周りが消えてしまったり、へこんで見えなかったり、そういうことがあった。

そこで割合、印刷のときに圧力がかかって、字が出やすい和紙で印刷した大藏經と、『縮刷藏經』、そんなところを見て、字の消えているところをみんな探し出しまして、そこへ今の新しい活字でもって、必要な字だけを白いきれいな紙に刷ってもらって、カッターで小さく切って、古い版に糊付けで張ったのです。鮮明にならないといけないので、ちょっと割合を小さくしました。ですから、版面が前の『大正新脩大藏經』より新しいほうがちょっと、何%か小さくなっています。今、考えるとゾッとしますのは、相当、神経を使って、その指定された部分の字へ間違いなく張るようにしていましたが、正直言って、時々、間違っただけで貼ってあります。それが今、慚愧にたえないところですけども、そういうのがあります。

それより前に『大日本佛教全書』を復刻す

るという話が、「鈴木学術財団」で起こりました。『大日本佛教全書』はご存じのとおり、この最後の紙に書いてありますが、菊判なのですが、その鈴木財団の方たちが、『大正藏經』のほうの復刊の様子を見に来て、どうやらうかと考えて、『大正藏經』と同じ四六倍判といいたまいますか、B5判といいたまいますか、それにしておまいますとしまして、そして縦の字詰めは同じで、どんどん追い込んでいって、ああいう大きい判にしておまいました。

確かにお経としてはそれだけ見ていけば、それでいいのですけれども、私たちが困ったのは、古い『大日本佛教全書』で、論文の後ろに引用のページ数なんか書いておまいますと、今度、新しいものではどこかわからなくなってしまう。新版のほうでは編成も少し変えたりしたものですから、どこに何があるかわからない。全部の目録を見なければわからないという状態になっておまいました。名著普及会さんがあつという間に旧版で出してくれたので、そのほうが使い良いということになったりおましました。

『縮刷藏經』に入っているのだけれども、『大正新脩大藏經』に欠けているものがあります。これをなぜ抜いたのかというのが、だいぶあちこち見て、思い出してみようとしたのですけれども、全然手がかりがありません。随分大事そうなもの、大きいから抜いておましたというものもありそうだし、日蓮上人のものが抜けたり、大きいものが抜けたりしておまいます。これらのものは逆に言うと、『縮刷藏經』をお使いいただいたらいいと思おいます。

『大正新脩大藏經』の一番後ろの奥づけを見ていただきますと、正倉院の聖語藏だとか宮内庁だとか、あっちこっちへ分散して、みんなで行きまして、いろいろと対校をいたしまして、綿密にテキストをつくったことがわかります。編成も今までの編成とは異なり、高楠順次郎先生（慶應2－昭和20，AD1866－1945）や渡辺海旭先生の新しい仏教学の成果を取り入れた編成にもなりましたし、宗教大学（現大正大学）の矢吹慶輝先生が敦煌で収集されまして、大英博物館のほうにも

あります敦煌文献が、古逸部として編入されおました。

それから、日本の部分が「続」として56巻から入つておまいますが、この日本は少し不完全です。それを補うことができるのが『大日本佛教全書』だろうと思おいます。『大日本佛教全書』は望月信亨先生等が中心になって、『大正新脩大藏經』のほうの日本で欠けている史伝とか系譜とか、地誌とか寺誌とか日記とか、あるいは密教のものなどが収載されておいます。その点では、『大日本佛教全書』は大変な成果を上げおました。

『大正新脩大藏經』には後に図像部がつきました。図像部には密教系の図像に関する叢書が入つておまいます。『大日本佛教全書』も密教の図像系のもの、例えば『阿婆縛抄』[承證（元久2－弘安4，AD1205－1282）撰]であるとか『十巻抄』[惠什撰（？－保延元，AD9－1135）]であるとか、天台・真言の密教図像が入つておまいます。それから、『大日本佛教全書』には、一つの日記のような形で、京都の青蓮院の『華頂要略』[本紀藤原爲善撰、藤原爲純増補、附録藤原爲純編（享保三－文化十一年）]が入つておまいます。

こういう密教の図像のものというのは、本の中に入れておまいますと、大変きれいにそろつておいます。しかし、実は、とりあえず巻数をつけていったところがあつたりおまします。

他には、『大正新脩大藏經』の中に『溪嵐拾葉集』[光宗撰（慶長元－貞和3，AD1311－1348成）]というのがあります。真言宗の密教のものも、何種類かありまして、そういうものは全てお寺さんで実際に使つておいた書物です。第一巻から一纏めにしておきれいに残つておいたものはいいのですが、『阿婆縛抄』の場合には、滋賀県大津市の天台真盛宗西教寺の正教藏と、比叡山延暦寺の藏に散在しておりました。

そこで、岩田教圓という方が丹念にしわを伸ばしたり、よく検討して編成を見たりして、一纏めにしようとお努力をされおました。その努力のおかげで我々は、便利に使わせて頂いておいますが、どうも怖いのは、それだけ一生懸命やつてくださったのだけれども、必ずしも

その編成が正しいとは言い切れないということです。異本が出てくれば、そういったことに関する対校も進むでしょう。

それから、『溪嵐拾葉集』は百巻近くあるというのですけれども、数えてみると、百ありません。『大正新脩大藏經』を、こしらえるときは大変だったのでしょうかけれども、今、厳密に見ていきますと、日本のほうは、大変、任意にできております。

それから図像のほうも、悪い言葉で言えば片っ端から収載しようという意図が見られます。高野山大学の仏教美術の大家である小野玄妙先生が『大正新脩大藏經』の図像部をつくらうということでお始めになりました。印刷技術は活字版からオフセット版になりまして、非常にきれいですけれども、一生懸命収集された図像を全部、入れてしまおうということをされました。

『大正新脩大藏經』は、特に日本の部分が『大日本佛教全書』に頼る部分が多く、不完全な部分が多々あります。また、図像のほうも、これからいろいろな問題が出てくると思います。

亡くなられた佐和隆研先生が、もう一回校正しようと始められたのですけれども、始めてすぐお体を壊されて、お亡くなりになってしまいましたので、『大正新脩大藏經』の図像部というのが、どうもなかなかうまく活用されていません。今の新しい写真の技術をもって作り直したらいいだろうと佐和先生もおっしゃっていましたが、そういう時代でもあるのかもしれない。

話は戻りますが『大日本佛教全書』と『大正藏經』の図像に『華頂要略』というのが入っています。先ほど言いました京都の青蓮院の記録です。これもまた膨大なものでありまして、全部が調査しきれていないのだらうと思います。この『華頂要略』は、総論的な天台宗のそもそもからの流れのところだけが収載されていて、後半の一人ひとりのご門主の伝記のほうは載せられていません。その書目を選ばれた、心意気まではいいわけですが、それぞれにまだやり残している仕事というのがありまして、まだ全体が完成したとは言えません。

そんなことで、『大日本佛教全書』のほうも、精力的に二十八部門、そろえているけれども、まだまだ十分ではない。ですから、今まで見てきた中で言うと、『大正新脩大藏經』が『縮刷藏經』にあって落としたものとか、今の『大日本佛教全書』や『大正藏經』の図像より先のところは、まだこれから、もっとやることはあるのかもしれない。経済的なことが一番ネックになるみたいですが、そういうものを乗り越えられたら、さらに進めることができるであろうと思います。

ここで皆さんにお勧めしたいのは、この頃だれも見てくださいませんが、『昭和法宝総目録』というものです。これは『大正新脩大藏經』と同じパターンで、3冊ございます。ここでは、『大正新脩大藏經』の底本と対校本の細かいところまで、どこは何と対校してあるというところがわかる『勘同目録』というものが載せられています。

それから先ほど申しましたように、『大日本校訂大藏經』（『縮刷藏經』）を土台にして、『大正新脩大藏經』編纂の作業をしたわけですが、そのときに正倉院の聖語藏であるとか石山寺であるとか、各お寺さんのあらゆる蔵書とできる限り対校をしまっていました。

その時に、それぞれのお寺さんの持っている蔵書目録、一切経目録と言われているものを集めて、『法寶目録』に並べてございます。目録があるだけで書物はないというの、残念ながら多少あるように思われますが、主なところの一切経の目録は、全部載っております。そんなところを見ていただくと、日本の漢文大藏經の全貌がわかってくると思います。

『大藏經』に加えて、その後、『弘法大師全集』、『傳教大師全集』などの、各宗の祖師の全集が続々と出ておりまして、最近では、書き下し文をつけた全集がだいぶ出るようになりました。

それから、各宗の全集ができていきます。最近の大きな成果とすれば、^{ななつでら}仏教大学が中心になって名古屋大須の七寺（稲園山七寺）の一切経の古逸經典を出されました。

「弘法大師全集」から始まって、いろいろなお祖師様等の全集がござりますが、これは

それぞれ編集の態度が違う。新旧ありまして、新しいほうですと、今の学生さんでも使い良い形のものでできておりますが、国文学、歴史学、仏教学の人など、それぞれのつくられたメンバーの内容によって少し力点が違ってきます。

例えば、多賀宗隼先生につくられた『慈圓集』という一冊のものがありますが、国文学のご専門の方なので、仏教系の著作というのは必ずしも全部載っているわけではない。そんなふうには全集というものも、いろいろ性格が違います。特に日本の方はまだまだこれから、やるべきことがたくさん残されています。

それから、各宗の全書というものがだいぶ出ておりまして、大抵の宗旨でまとめられております。天台宗のほうでは、『傳教大師全集』や『惠心僧都全集』といった比叡山で出したもの、それから、『智證大師全集』などの、『大日本佛教全書』そのまままで済ませてしまったものなどがあります。

あるいは、この『大正新脩大藏經』を初め、刊行されたものがたくさんありますので、その間を縫って、漏れているものを中心にして、『天台宗全書』というのが作られています。さらに、『続天台宗全書』として、大きいものを選んで25巻まで出しました。さらに続編が出る予定です。

それから、国訳は大東出版の『国訳一切経』が非常に網羅的ですが、その前に出ております『国訳大藏經』というものは、これは解題が大変参考になって、今でもその解題を拝見しないと先へ進まないようなところがあります。

それから、学生たちが便利だというのは、『昭和新纂国訳大藏經』です。これは総ルビでございます。質はともかくとして、読んでいくのには便利という形をしております。それから、大蔵出版で『新国訳大藏經』を今、刊行しておりますが、ご担当の方、それぞれで、国訳は質的にそろっていないようです。そういうところはちょっと残念だと思います。また、新しい研究が入っているという点でいいかなと思いますが、そっちまで及んでいないような場合も時々あったりしますので、残念な思いもします。

学生さんたちに仏教の叢書というときに、どの叢書の何がいかるところまで、考えて教えなければならないし、なるべく簡単に事を済ませようとする学生さんに、うまく対校してあるものまで目を配ってと指導することは、なかなか難しいんですが、現在努力しているところであります。

きょうは漢訳中心で申し上げましたが、ご存じのとおり、『南傳大藏經』というのがあります。これは昭和十年代に発刊されて、十八年ぐらゐまでかけてできたもので、底本はPTS、パーリテキストソサエティ（ロンドン）のパーリ語のローマナイズしたものから日本語に訳してくださったものです。しかし、昔の訳なものですから、いわゆる文語文で訳してありまして、なかなか読んでピンとこない。このごろ、駒沢の片山（一良）先生が口語訳をしていらっしゃるの、そういうのがいいと思います。

そういう『南傳大藏經』の部類も片山（一良）先生のもの中核にして、新しいものが欲しいでしょう。別に、『ジャータカ』だけは、中村元（明治45—平成11、AD1912—2000）先生が、『ジャータカ全集』というのをつくられましたので完璧かと思えます。

それから、チベットの文献は一般的に刊行して、日本で普及までいきませんが、各研究機関で購入できたものに、鈴木学術財団の『北京版』があります。あとは、東北大学や京都大学、あるいは本学〔大正大学〕で持っているものがありますが、刊行するというまでには、至っておりません。そちらのほうはこれからまだ開拓されていくのだらうと思えます。

私も一部分に偏った研究ですので、全般にうまく公平にわたらなかつたかもしれませんが、筋だけ頭に入れておいていただいたら、ありがたいと思えます。（拍手）

— 了 —

（校正：大正大学総合佛教研究所研究生 木内堯大）

〈 配付資料 〉

日本で刊行された仏教関係叢書について

I、大日本校訂縮刻大藏經 (縮刷藏經・縮藏)

菊判五号活字一段組、1頁20行45字 418冊 40帙 千字文順
 明治13年4月～明治18年7月 東京 「弘教書院」 島田番根・福田行誠ら主宰
 底本；増上寺所藏『高麗藏』、『宋藏』、『元藏』
 対校本；獅谷忍激校正『鐵眼版』、増上寺所藏『宋藏』、『元藏』

第一 經藏

大乘經	華嚴部	28部	233卷	方等部	363部	1133卷
	般若部	29部	747卷	法華部	14部	57卷
	涅槃部	16部	121卷			
小乘經		321部	778卷			
	合計	771部	2069卷			

第二 律藏

大乘律		30部	49卷	小乘律	71部	496卷
	合計	101部	545卷			

第三 論藏

大乘宗經論	93部	403卷	大乘釋經論	25部	180卷
大乘諸論釋	11部	77卷	小乘論	46部	722卷
印度撰述部	63部	167卷			
	合計	238部	1546卷		

第四 祕密藏

録内 (元祿年間黄檗印房開板)	187部	324卷			
録外 (豊山印刻 享保、享和年間)	111部	120卷	黄檗印房所刻	15部	17卷
			高野山所刻	3部	32卷
	靈雲寺所刻	4部	11卷		
	録外小計	133部	180卷		
閲藏知津方等部別出	250部	424卷			
	合計	570部	928卷		

第五 雜藏

支那撰述			論疏部	4部	28卷	
經疏部	44部	56卷				
懺悔部	12部	24卷				
諸宗部	三論宗	3部	8卷	法相宗	2部	12卷
	天台宗	29部	131卷	淨土宗	5部	14卷
	諸宗部小計	75部	616卷	華嚴宗	11部	17卷
傳記部	16部	222卷	禪宗	25部	430卷	
護教部	20部	156卷	纂集部	6部	280卷	
音義部	6部	170卷	目錄部	20部	179卷	
支那撰述計	210部	2381卷	序讚詩歌部	7部	120卷	
日本撰述						
十宗	28部	65卷				
	総計	1918部	8539卷			

* 復刻 頻伽藏 (上海) 頻伽精舍刊 [(清) 宣統3年～民國9年] 四号活字一段組40帙

II、大日本校訂訓點大藏經

四六倍版 四号活字 二段組 1段 20行 22字詰め全 36套 (每套 10冊) 全 347冊 千字文順
 明治 35年 4月～明治 38年 4月 (京都) 藏教書院 濱田竹坂 (設置者) 米田無諍編纂
 底本; (京都) 法然院 獅谷忍激 黄檗版を建仁寺高麗藏 (北麓本) での対校の本 寶永 3～7年

1、經

①, 大乘經					
般若部	22部	711卷	寶積部	38部	174卷
華嚴部	26部	227卷	涅槃部	13部	103卷
五大外部			重譯經	252部	532卷
②, 小乘部					大集部 25部 155卷
阿含部	138部	369卷	單譯經	103部	242卷
③, 宋元入藏諸大小乘經				238部	509卷
④, 宋元入藏諸大小乘經之餘				62部	180卷
(①～④小計)			1084部	3570卷	單譯經 167部 368卷

2、律

①, 大乘律	26部	53卷
②, 小乘律	60部	465卷
(①～②小計)	86部	518卷

3、論

①, 大乘論	96部	525卷
②, 小乘論	37部	705卷
③, 宋元入藏諸論	23部	125卷
(①～③小計)	156部	1355卷

4、西土此土撰述

①, 西土聖賢選集	145部	279卷
②, 此土著述	154部	1360卷
(①～②小計)	299部	1639卷
(1～4総計)	1625部	7082卷

III、大日本續藏經 (卍續藏・續藏)

四六倍版 四号活字 二段組 1段 18行 22字詰め 全 150冊 (每套 5冊) 全 750冊
 明治 38年 4月～大正元年 11月完成 (京都) 藏教書院 前田慈雲会長 中野達慧編纂主任
 大日本校訂訓點大藏經の続補

第一輯

第一篇<印度撰述>

1, 經部	45部	120卷	2, 律部	6部	27卷
3, 論部	7部	45卷	4, 密經軌部	149部	186卷
5, 大小乘釋經部	466部	2296卷	6, 大小乘釋律部	76部	471卷
7, 大小乘釋論部	108卷	590卷	8, 諸宗著述部	13部	24卷
9, 禮懺部	4部	4卷			

第二篇<中國撰述>

甲 諸宗著述部	(三論宗、法相宗、天台宗、華嚴宗、眞言宗、戒律宗、淨土宗、禪宗、禪宗語録通宗、禪宗語録別集)	633部	1797卷		
乙 禮懺部		50部	152卷	史傳部	162部 1239卷
經部		11部	11卷	大小乘釋經部	1部 2卷
諸宗著述部		6部	13卷		

* 卍藏經に編入できず、卍續藏に入れられたもの

黄檗版中 — 北藏續入經

密教諸經軌

偽撰とされ未入藏のもの — (明續藏經のすべて)

觀世音菩薩往生淨土本緣經、十往生阿彌陀佛國經、淨慶三昧經、地藏菩薩發心因緣十王經、大梵天王問佛決疑經、像法決疑經、など

禪宗語録類には省略あり

* 第二輯は予定されていたが、『日本大藏經』として刊行された。

IV、日本大藏經 (日藏)

菊判五号活字 20字17行2段 全48巻 34600頁

大正3年9月~9年3月 日本大藏經編纂會

會長 松本文三郎

編集長

中野達慧

版權は京都帝國大學文學科に在留

第一卷	華嚴部章疏一	13部	35巻	第二卷	華嚴部章疏二	1部	48巻
第三卷	三論宗章疏一	11部	28巻	第四卷	華嚴部章疏三	4部	10巻
	方等部章疏一	4部	19巻				
第五卷	三論宗章疏二	2部	3巻	第六卷	方等部章疏二	4部	14巻
	法相宗章疏一	9部	26巻				
第七卷	華嚴淨土論章疏一	4部	28巻	第八卷	曹洞宗章疏一	5部	108巻
第九卷	法相宗章疏二	24部	65巻	第十卷	方等部章疏三	7部	39巻
第十一卷	戒律宗章疏一	11部	29巻	第十二卷	方等部章疏四	3部	27巻
第十三卷	戒律宗章疏二	38部	50巻	第十四卷	眞言密教論章疏上	5部	42巻
第十五卷	戒律宗章疏三	13部	41巻	第十六卷	眞言密教論章疏下	11部	48巻
第十七卷	修驗道章疏一	60部	127巻	第十八卷	法華部章疏一	5部	35巻
第十九卷	大乘律章疏一	6部	24巻	第二十卷	三論章疏一	2部	7巻
第二十一卷	大乘律章疏二	4部	31巻	第二十二卷	大乘律章疏三	9部	39巻
第二十三卷	諸大乘論章疏	5部	22巻	第二十四卷	密教部章疏上一	18部	66巻
第二十五卷	方等部章疏五	6部	12巻	第二十六卷	密教部章疏上二	1部	85巻
第二十七卷	唯識論章疏一	1部	30巻	第二十八卷	法華部章疏二	20部	28巻
第二十九卷	三論章疏二	3部	3巻	第三十卷	法華部章疏三	1部	24巻
	掌珍智度宗論章疏	4部	11巻				
第三十一卷	理趣經釋章疏一	13部	50巻	第三十二卷	密教部章疏下一	6部	28巻
第三十三卷	唯識論章疏二	9部	21巻	第三十四卷	方等部章疏六	9部	26巻
第三十五卷	般若部章疏	23部	40巻	第三十六卷	密教部章疏下二	11部	30巻
第三十七卷	修驗道章疏二	43部	70巻	第三十八卷	修驗道章疏三	59部	65巻
第三十九卷	金七十論章疏・勝宗十句義論・六離合釋章疏					15部	25巻
第四十卷	華嚴宗章疏下	5部	26巻	第四十一卷	大乘律章疏三	6部	26巻
第四十二卷	華嚴宗章疏下	26部	33巻	第四十三卷	天台宗密教章疏一	57部	64巻
第四十四卷	天台宗密教章疏二	7部	36巻	第四十五卷	天台宗顯教章疏一	30部	48巻
第四十六卷	天台宗顯教章疏二	85部	99巻	第四十七卷	眞言宗事相章疏一	53部	70巻
第四十八卷	眞言宗教相章疏一	24部	154巻				

総計 792部 2161巻

V、大正新脩大藏經 (大正藏經・正藏)

四六倍版 5号活字 3段組 1段17字29行

大正11年9月 (東京) 大正一切經刊行會

大正13年5月第一巻刊行~7年2月完成

都監 高楠順次郎 渡邊海旭 編集主幹 小野玄妙

阿含部	155部	390巻	本緣部	72部	334巻	般若部	43巻	777巻
法華部	17部	60巻	華嚴部	32部	254巻	寶積部	66部	303巻
涅槃部	23部	128巻	大集部	28部	184巻	經集部	451部	855巻
密教部	618部	965巻	律部	87部	515巻	釋經論部	32部	208巻
毘曇部	28部	659巻	中觀部	15部	53巻	瑜伽部	49部	288巻

論集部	66部	201卷	經疏部	111部	806卷	律疏部	12部	58卷
論疏部	35部	309卷	諸宗部	189部	647卷	史傳部	96部	565卷
事彙部	18部	315卷	外教部	9部	12卷	目錄部	42部	155卷
續經疏部	83部	541卷	續律疏部	3部	79卷	續論疏部	48部	506卷
續諸宗部	420部	1520卷	悉曇部	31部	62卷	古逸部	135部	158卷
疑似部	57部	63卷						

総計 3053部 11970巻

*縮刷藏經にあって、大正藏經に欠けているもの

大明仁孝皇后夢感佛説第一希有大功德經 2巻、大方廣佛華嚴經疏演義鈔 30巻(澄觀)、華嚴懸談會玄記 40巻(普瑞)、圓覺經略疏之鈔 25巻(宗密)、首楞嚴經義海 30巻(咸輝)、大佛頂首楞嚴經會解 20巻(惟則)、妙法蓮華經解 20巻(戒環)、修儀要旨 1巻(知禮)、肇論新疏游刃 3巻(文才)、華嚴原人論解 3巻(宗密)、華嚴七字經題法界觀三十門頌 2巻(本嵩)、始終心要 1巻(湛然)、天台四教儀集註 10巻(蒙潤)、宗門統要續宗 22巻(清茂)、禪宗正脈 20巻(如雪)、禪宗頌古聯珠通集 40巻(普會)、古尊宿語録 48巻(涓蹟藏主)、天目中峰和尚語録 1巻(慈寂)、天童密雲禪師年譜 1巻(道忞)、大明三藏法數 50巻(一如)、教乘法數 40巻(圓澥)、御製祕藏註 30巻、同道遙詠 11巻、同緣識 5巻(太宗)、輔教篇 3巻(契嵩)、新編藏教音義瑞函録 30巻(可洪)、一切經音義 25巻(玄應)、新譯大方廣佛華嚴經音義 2巻(慧苑)、紹興重雕大藏音 3巻(処觀)、御製蓮華心和廻文偈頌 25巻(太宗)、等序讚詩歌部 7部 120巻、法華題目鈔、十法界明因果鈔、内證血脈鈔、十法界鈔、總勘文鈔、教機時國鈔、本門戒體鈔、立正觀鈔、受職功德鈔 各1巻(日蓮)

計 45部 675巻

*大正新脩大藏經に新たに編入されたのは、以上を差し引いて、1182部 4011巻

大正新脩大藏經 圖像部 12巻
昭和寶法目錄 3巻

VI、大日本佛教全書 (全佛・日佛全)

菊判洋装 5号活字 17行2段組 全150冊

明治44年9月 (東京)佛書刊行會 發足 高楠順次郎 大村西崖 編纂主任 望月信亨

大正元年5月～11年 刊行

28部門

目錄、總記、諸經、華嚴、法華、台密、眞言、悉曇、淨土、融通念佛、時宗、戒律、三論、法相、因明、俱舍、起信、禪宗、行事、宗論、史傳、補任、系譜、地誌、寺誌、日記、詞藻、雜

総計 953部 3396巻